



営農タイムリー！



発生予察情報について(6月)

2022年6月1日発行

病害虫発生予報第3号(6月)

京都府病害虫防除所より、6月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第4号(6月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (<u>平年比</u> (前年比))
イネ	葉いもち ニカメイチュウ(第一世代) ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ	<u>やや多</u> (やや多) 並 (並) 並 並 並 (並) <u>やや多</u> (やや多)
ブドウ	べと病	並 (やや多)
カキ	落葉病 うどんこ病	並 <u>多</u> (やや多)
果樹全般	カメムシ類	<u>やや多</u> (並)
果菜類	うどんこ病	並 (並)
ネギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	<u>やや多</u> (並) やや少 (並) <u>やや多</u> (多)
果菜類	ハダニ類 アザミウマ類	<u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (多)
野菜類	アブラムシ類と モザイク病	並 (並)

1. イネ 葉いもち

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 空気伝染し、発病適温は14～30℃(最適25℃)である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑が進展したり、胞子の形成量が高まったりする。
- (2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。
- (3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。
- (4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- (5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

2. イネ イネミズゾウムシ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオウムシの常発地では、この方法でイネドロオウムシも合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3. ブドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- (2) 発病適温は22～25℃である。
- (3) 5～6月に多雨であると多発生となる。
- (4) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- (5) 本病は新しく柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

4. 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) 夜園外から飛来し局地的に行性であるため、夕方の防除が効果的である。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

5. カ キ うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の被害葉(落葉)や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。
- (2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。

6. ネ ギ さび病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

7. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spot virus : IYSV) による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 産雄性生殖系統と産雌性生殖系統の殺虫剤感受性は異なるので、産雄性生殖系統が優占している地域(山城及び南丹地域)では注意する。

8. 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1 スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)

- (1) 苗を移植する前に、**田面を細かく耕うん**し、越冬した大きな貝を殺す。
- (2) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。
- (3) 耕うんや代掻きの時に農業機械がほ場間を移動する場合には、機械に付着した貝を移動させないように、都度洗浄を行う。
- (4) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

果樹

1 カキノヘタムシガ、カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

2 フドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に雨曇天が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) 開花前からハウス栽培では換気に努め、予防散布を徹底する。
- (3) 果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。